

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 西 脇 保 幸 会員数 約530人)

T E L 042-329-7729

地 理 A

1 前 文

センター試験では4単位科目であるB科目に比べ、2単位科目であるA科目の受験者は少ない。しかし、科目設置状況をみると地理Aを設置している高等学校等は必ずしも少ないわけではない。再三指摘するように、センター試験が高等学校教育に与える影響は大きい。私たちは、大学入試という観点とともにこれからの高等学校教育のあるべき姿を考えつつ評価・分析を行った。今回特に着目したのは次の3つである。第1は「地理」の科目特性である。「地理」は、現代世界の諸事象を扱うため、内容が「現代社会」や「政治経済」などと共通する場合も少なくない。とはいえ、扱う視点、分析の方法は異なっている。つまり、「地理」の視点を生かした問題になっているかということである。第2の点は、技能面の評価である。地理Aでは、地理B以上に知識の習得より技能の習得に重点を置いている。具体的には、表やグラフ、地図そして画像の読解についての出題の量と質に着目している。第3の点は、第1の「地理」の科目特性ともかかわるが、スケールに関することである。「地理」では世界規模の事象から市町村以下のレベルの事象まで扱っているが、それらの内容とバランスが適切かどうかについても検討した。結論からいうと、本年の地理A本試験の問題は全体として適切であったと評価することができる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 地理的基礎事項の出題は、例年世界地図を冒頭に提示し、設問を配する例が多いが、今年も同様の傾向である。本年は、ブラジルを中心とする正距方位図法を素材としており、見慣れていない受験生は戸惑ったかもしれない。問うている内容は比較的易しいので、世界地図に慣れているかどうかを問うことになったと思われる。

問1 正距方位図法の性質が理解できていれば、正解できる。平易な出題である。

問2 時差に関する出題で、計算は平易である。正距方位図法から経線を読ませる点で受験生は戸惑ったかもしれない。様々な図法の地図に見慣れているかがポイントなる出題である。

問3 地体構造と地下資源に関する出題である。地理学習では頻出の事項。短文アとイについては、地体構造と地下資源とが結びつくので理解しやすい。短文ウのボーキサイト鉱床については、気候環境とのかかわりで説明するのが一般的であり、違和感がある文章である。またオーストラリアでボーキサイトを産出することは学習するが、「オーストラリア南西部」となるとはほとんど学習しないと思われる。

問4 該当する緯度が分かれば、解答可能な気候問題である。チリ北部の乾燥地域をたずねて

おり、地理学習では必ず学習する内容といえる。なお、この問題までが、図1をつかっているので可能ならば前頁に収めたい。

問5 領域に関する出題。短文にある「高潮時の海岸線」、「海底ケーブルの敷設」などの知識はやや難である。細かなことではあるが、排他的経済水域は、あくまで水域であるから「航空機の飛行」はできない。誤解のない日本語を心掛けてほしい。

問6 写真とその説明の組み合わせ問題である。写真は何とか区別できそうであるが、より明瞭な写真をお願いしたい。また、アグロフォレストリーについての短文は意欲的な出題だと評価できる。

問7 尾根線と谷線を模式的に示した地図の読図問題。地性線の意味や作成方法を理解していなければ、解答には至らない。また、各短文の正誤判定ではなく、読み取れるかどうかを訊いているので、出題のレベルは高い。正解の短文は平易にしてあるものの、受験生は困惑したのではないか。読図問題として、良問と判断するが、地理的基礎の大問の中で扱う点に関しては疑問が残る。

問8 断面図から低地は水田と判断できるが森林と畑地の区別は、海岸沿いに防風林に気づくかどうかである。やや難しい。しかしながら平面図や地形断面から地形や土地利用を推定することは基礎的な技能であり、良問である。

第2問 国境を越えた結びつきに関する設問。難易度に改善を要する設問があるものの、統計資料、図、グラフを用い、多面的に地理的事象を読み取らせようとする姿勢は評価できる。

問1 以前から貿易総額が多いBがアメリカ、急激に貿易総額が増加したAが中国と判断できる。グラフの読み取りに関する標準的レベルの問題である。

問2 各輸入品は上位国の特徴がはっきりとしており、解答は難しくないであろう。

問3 それぞれの指標が意味することを考えれば解答は可能であるが、高校の学習内容からみて難易度の高い問題である。日本を判断させるのはやや難しい。特徴のはっきりしているシンガポールを問うてほしかった。

問4 Eは北アメリカ・ヨーロッパでやや多いことから輸送機械製造業（自動車）、Fは中国を含むアジアが圧倒的に多いことから繊維製造業と判断できる。教科書レベルの標準的な問題であり、解答は容易であろう。

問5 Qは出国者数が最も多いことから日本と判断できるが、韓国と中国の判別に迷った受験生がいたかもしれない。

問6 ピラミッドの形から各国との関係を考えることができる興味深い出題である。人口数が示してあるので解答は可能であるが、人口ピラミッドの型から国籍を判断させるのは、地理Aの学習内容から考えるとやや難しい。

問7 難易度は標準的であるが、単純な文章の正誤を問うており、「政治・経済」や「現代社会」的な問題という印象を受ける。問い方に工夫してほしい。

第3問 アフリカを対象とした地誌の問題。地図や写真などを使用し、多角的に捉えさせようとしている点は評価できる。ただし、写真・地図の活用に関しては再検討をお願いしたい。

問1 アフリカを流れる大河川に関する問題。それぞれの選択肢に流域に関するキーワードが書かれており、容易に答えることができる。

問2 4つの地形断面図から適切なものを選ばせる問題。ケニア周辺の大地溝帯の特徴が分かれば、判別は容易である。

問3 農牧業の特徴から判別させる問題。天然ゴムが東南アジアを中心としたプランテーション作物であるとの知識があれば容易に答えられる。地図を参照しなくても短文だけで解答できるのが残念である。

問4 「カンガ」という民族布の名称を初めて目にした受験生も多かったはずだが、説明文をよく読めば、解答はそれほど難しくはない。写真を使っていながら設問に生かされていないのは残念である。

問5 それぞれの都市の特徴を表した写真を判別させる問題。写真に添えられた説明文を読めば、解答することができるが、掲載された景観写真だけでの判別は難しく、都市の選定や出題方法にもう少し工夫が必要ではなかったか。

問6 各国の産業や資源開発について適当なものを答えさせる問題。図1に各国の位置を示している配慮がよい。国名が分からなくても、その位置から各国の輸出品とそれぞれの特徴をある程度類推できるが、地理Aとしてはやや難しい。

問7 アフリカにおけるODAの拠出国の組み合わせを問う問題。旧宗主国や拠出国の経済規模、拠出国からの距離などの知識があれば、容易に組み合わせが判別できたはずである。

a、bの判別だけで問題は成り立っており、1カ国しかないcを加える意味はあるのだろうか。

第4問 二酸化炭素排出量や自然エネルギーを活用した発電、環境変化・自然災害、水利用などの環境問題について幅広く問う問題であり、標準的レベルといえる。グラフや統計地図、写真といった資料を活用したものと、不適当な文章を選択する問題の2種類により出題となっている。

問1 韓国、タイ、ドイツにおける二酸化炭素排出量の推移について、折れ線グラフから判断させる標準的レベルの問題である。それぞれの国の特徴を理解していれば確実に答えられる。先進国・NIEs（新興工業経済地域）・発展途上国の工業化・経済発展の時期、環境対策の特徴と二酸化炭素排出量の関係についての理解を問う良問である。

問2 日本でみられる自然エネルギーを利用した発電に関する知識を問う基本的な問題である。風力発電、太陽光発電、地熱発電について、経済性やエネルギー量、問題点をしっかり理解していれば容易に解答できる。発電所の写真と説明文を組み合わせで解答する形式になっているが、どの写真もわかりやすいものを使用しており、解答しやすくなっている。

問3 世界各地の環境変化や自然災害に関する知識を問う標準的な問題である。基本的な知識を備えていれば容易に答えられる。モルディヴ近海における地球温暖化による海面上昇の被害、ペルー沖海域でエルニーニョ現象、東シベリアには氷河が見られない、グレートバリアリーフには火山がない（新期造山帯ではない）、ハリケーンが襲来しても津波は起きない、アルゼンチン・パラグアイ国境付近にはタイガがない、といった知識も基本的事項である。

問4 地球環境問題に関する国際協力についての知識を問う問題である。IPCC（気候変動に関する政府間パネル）、東アジアの酸性雨問題、東南アジアの熱帯林保護、湿地の保護（ラムサール条約）が取り扱われているが、いずれも基本的事項と考えられる。現代社会的な問題であり、地理の問題としては工夫が必要。④のモントリオール議定書が明確な誤りのため、解答には支障はないが、東アジアで酸性雨観測のネットワークづくりがすすめられているこ

とや東南アジアで日本のNGO（非政府組織）が植林活動を行っていることは、高等学校等で取り扱われていない可能性がある。

問5 水利用に関する課題について問う標準的な問題である。4つの説明文から不適当なものを1つ選ぶ形式であるが、どの選択肢も基本的内容といえる。ダムが河川中の土砂をせき止めるため河口まで土砂が到達しなくなり海岸付近で侵食が進むことと三角州（デルタ）が堆積地形であることを理解していれば、容易に解答できる。

第5問 地理B第6問と共通問題である。知多半島という一つのまとまりある地域を取り上げ、自然から人文にわたり様々な地理的内容をたずねている。愛知用水開削や国際空港開設など作問のためのトピックも豊富である。また名古屋大都市圏の一部でもあり、大都市との距離を考えさせる問題もある。優れた地域選定だと考える。全体として良問に仕上がっている。

問1 数値データを用いた地図の読み取り問題である。間違わせ方が単純で、やや平易な問題である。このような基本的問題も必要であることは理解するが、もうすこし読み取らせる内容に工夫がほしいところである。

問2 きちんと読み取ることができれば、解答することができ、やや平易な問題である。統計地図を正確に読み取ることが重要な技能であり、今後も出題を続けてほしい問である。

問3 新旧地形図を比較させる問題である。たずねている内容は基本的内容であるが、短文内容を丁寧に読図する必要があるので、受験生は解答に時間がかかったのではないか。このように地図を比較する技能問題は今後も重視して欲しい。

問4 軽量で高付加価値の品目が並ぶものを航空貨物と考え、燃料や重量のある品目を船舶貨物と考える。その後、輸出と輸入の品目をさらに比較させている。ステップを踏んで考察させており、良問といえる。

問5 常滑市の景観写真から気づいた点を調査するという設問。フィールドワーク中に感じた「疑問」を大切にしてほしいというメッセージが込められており、好感が持てる。正解となる短文は地形図からの判読できない内容を判断することになっており、訴求点がオーソドックスとなっているのが残念。しかしながら、このような地域調査の手法に関する問は今後も続けてほしい。

問6 内容は工業立地と統計の読み取り。地理Aの問題としてみると、工業立地は範囲外である。しかし会話内容から解答は推定可能なので、可としたい。また、市役所職員との会話を素材とした設問であり、フィールドワークをイメージさせようとした点で、出題者の努力がうかがわれる。

3 ま と め

結論としては、全体として本年度の地理Aの出題は適切であったといえることができる。しかしながら個々の問題の分析に記したように改善すべき課題がある。最も大きな課題は写真を使つての出題である。地理では写真などの画像の読み取りは極めて重要な技能であると言える。しかし、画像を提示しながら十分に生かしていない問題がある。これは、グラフ等を使った出題についても同様である。もう一つ、印刷の問題で読み取りにくいという点である。教科書もカラーで印刷されている今日の状況から考えれば、センター試験の出題もカラーでより鮮明な印刷することを求めたい。

地 理 B

1 前 文

本試験の地理Bは地歴・公民科目の中でも日本史Bに次いで受験者数が多く、注目度の高い科目である。この点を踏まえ、分析にあたっては、次の2つの観点に留意した。1つ目は、1つの1つの小問が良問かどうかだけでなく、全体として、基礎知識問題・技能問題・思考を問う問題等がバランスよく配されているかどうかである。2つ目はどのような知識内容や地理的技能、思考力が問われているかである。センター試験の問題は、高等学校の地理教育に与える影響が大きく、ある意味では日本の地理教育の方向性を示すともいえる。したがって、あえてやや厳しいコメントをしたものもある。

検討の結果、個々には検討を要する問題はあるものの、おおむね良問が多く、適切な仕上がりになっている。しかしながら、昨年指摘した他科目と比べ標準偏差が小さい、すなわち弁別性が悪いという課題については今後も検討を続けていく必要がある。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

第1問 世界の自然環境に関する問題で、世界地図やグラフなどの素材を活用した出題形式が中心となっている。分野的には海洋地形、地震の震源分布、湖の形成、成帯土壌、気温、降水量などについて、さまざまな観点から幅広く問うている。標準的な問題が多い。

問1 世界の海底地形についての理解度を確認する基本問題である。しかし、アルゼンチン沖大西洋に大陸棚や大陸斜面が存在することを把握している者は少なかったであろう。

問2 地震発生数の分布は、新期造山帯の分布に近いことから、その分布をおさえていれば確実に解答ができる。新期造山帯の分布を地震発生数の緯度・経度別の分布のグラフから読み取らせるもので、解くのに時間を要するが、良問であるといえる。

問3 湖の形成要因の理解を問う標準的な問題である。カスピ海の成因はあまり知られていないかもしれないが、五大湖とバイカル湖の成因はよく知られているので、容易に解答することができる。短文スに「世界最大の淡水湖」という表現がある。面積ではスベリオル湖(J)だが、貯水量ではバイカル湖(L)である。詳しく知っている受験生はかえって迷ったかもしれない。丁寧な記述をお願いしたい。

問4 成帯土壌の分布に関する理解を問う標準的な問題である。地図上に示された土壌の分布を、気候分布を考慮しながら判断させる良問といえる。

問5 各地の年平均気温と気温の年較差に関する問題である。各都市の緯度だけでなく、標高や近くを流れる海流、風など気候因子を多角的に考えれば十分解答できる。気候に関するさまざまな知識を考慮に入れながら気温の特徴を考えさせるもので、良問である。

問6 緯度の異なる4つの地点における夏と冬の降水量の分布について考えさせる問題である。この問も、気候に関するさまざまな知識を考慮に入れながら降水量の特徴を考えさせる良問であるがやや難しい。

第2問 エネルギーと産業について多角的に問うている。一部の問題に改善すべき点はあるもの

の全体としては適切である。グラフ・表・地図で出題する場合、どの国を取り上げるかということが問題の質を左右する。今回の出題は出題者の配慮が感じられ、よく仕上がっている。

問1 農業地域と成立要因について組み合わせて解答をさせる問題。基本的知識を問う出題である。地理問題において歴史的事項を扱う場合の視点が示されている。

問2 グラフの読み取り問題。どの国を取り上げるかによって問題の難易度が変わり、問題の質自体を左右する。4カ国とも特長のある国なので、わかりやすい。

問3 上位10カ国に絞ったことがポイント。地図が見やすくなり、かつキーになる国が含まれるからである。出題者の配慮が感じられる良問。

問4 どの国を選ぶかが問題の質を左右する。韓国とフィリピンを扱ったのは適切である。

問5 ③が明らかな誤りであることから、解答には問題はない。しかし、④の文章については若干の疑問がある。大都市圏内のサイエンスパークでも事業所の進出に苦戦している事例もある。例えば、上総アカデミアパークではバイオ関係の民間企業の進出は1社しかなく、集積といえる状況にはない。

問6 グラフを使つての出題であるが、解答には必ずしもグラフの読み取りを必要としないのは残念である。とくに、選択肢①、④はグラフとは直接関係のない記述になっており、改善が望まれる。

第3問 例年この第3問は都市と村落、生活文化に関する大問となっている。特に今回は良問が多い。都市に関する定番の指標、分布図、散布グラフと工夫された出題がされている。解答に際して明確な論理があり良問として仕上がっている。内容的には都市、再開発、都市圏、立地、生活、余暇等が含まれ、バランスよい大問となっている。

問1 アジア、アフリカ、オセアニア、ヨーロッパを判断するのに適切な指標を判断させている。良問である。

問2 ロンドンの都市計画についての設問で、時間軸的視点の出題が特徴的である。ドッグランズ再開発、田園都市構想、大ロンドン計画についてのある程度の固有の知識がないと解答の判断をしにくい。大学入試としての知識レベルについて議論する事例の一つになろう。

問3 大都市圏の都市景観について述べた文章と人口指標の組み合わせについて、具体的な知識がなくても、一般化された地理的思考で解答できる良問である。昼夜間人口比率と老年人口比率がよく考慮されて選ばれており、解答に際して出題者の配慮が行き渡っている。

問4 今回のセンター試験の中でも特に優れた良問である。分布事象（大型小売店、銀行、小学校）、背景地図（市街地、道路、鉄道、駅）ともにとても適切な取り上げ方をしている。地図表現もとてもわかりやすい。このような設問がなされると、身の回りの地域の学習での成果がよく評価される。一般的な分布パターンの読み取りに持ち込んでいるので、長野であるといった固有の知識がなくても解答可能である。作図には労力がかかっていると思われるが、今後もこのような傾向の出題をお願いしたい。

問5 ユニークな指標を使っているが、実感できるものであり違和感はない。それぞれの都道府県の数を含ませるなど、とても工夫された出題方法である。グラフを上手く読み取ることを要求する良問である。ただし日本の地方区分に関しては、厳密に定まったものがないので、何らかの形で示した方が良かったのではないだろうか。また、問題が裏表2ページにわ

たっているが、見開き2ページに配置した方がよいと思う。

問6 問1～問5と工夫された出題形式の設問が続いているので、このような正誤問題を入れることによってバランスが取れた構成となる。文章および下線部の部分も適切である。

第4問 西アジアと周辺地域に関する大問。写真の用い方にやや改善を要する設問があるものの、村落・都市、自然環境、産業、交通、宗教・民族と特定の分野に偏ることなくバランスよく出題されており、地誌の問題として評価できる。

問1 解答に際して、首都の位置などの知識を前提とする部分もあるが、それぞれの地図を見比べながら、河川や砂漠の状況などをイメージしていかなければならない。西アジアの気候や地形など自然環境を総観的に理解しておかなければ、解答は困難である。出題者のアイデアが光る良問といえる。今後集落分布を用いた類題が地理教育に広まる可能性がある。

問2 イはカナートが発達しているイランで多いことから地下水、アは砂漠気候が大半を占めるクウェートとサウジアラビアで少ないことから地表水と判断できる。教科書レベルの難易度である。

問3 カを1人当たりGDPが低いイラン、クを1人当たりGDPが最も高く、近年、経済発展がめざましいアラブ首長国連邦と判断すれば解答は難しくない。

問4 4枚の写真を活用した問題。しかしながら短文選択では、写真を見なくても解けてしまう知識をたずねる問題となっている。もっと写真から読み取れる内容を問うなど、設問形式に工夫がほしい。

問5 教科書レベルの基本的な問題である。

問6 問い方がやや単純である。例えば、各国のイスラム教徒の宗派別割合を示す図やグラフを用いるなどの工夫をすれば、もう少し地理らしい問題になったのではないか。

第5問 時事的な諸事象を扱った問題。受験生にとって、初見の問題は少なく、解答は比較的容易であったと考えられる。

問1 各国の森林面積の経年変化の特徴について問う問題。それぞれの国の森林政策や産業面における特徴を把握してれば、答えることができる。地図を用いなくても解けてしまう。むしろ丁寧に地図を読み込もうとすると、フランスやブルキナファソの位置は判読しにくく時間を要したのではないか。また、ブルキナファソという国名と位置は高校生が押さえておかなければならない知識なのかについては、検討の余地があると考ええる。ブルキナファソが高校生が必ず学ぶべき国名だとする考えは、無論存在してもいいと考える。いずれにせよ、高校の地理授業にセンターが与える影響が大きいことを考慮し、出題する地名を選択していただきたい。

問2 センターピボットについては、受験生にとって一度は目にしたことがある写真であり、容易に解答を導くことができる。

問3 鉱産物の開発・利用に関する問題。産業振興によって財政が豊かになっても、必ずしも所得が分配されない。受験生がこのような基礎的知識をもっていれば、答えを導くことはそれほど難しくない。

問4 3つの国の特徴について、リサイクルの動向やその背景について、知識を有していれば、容易に正解を導き出せたはずである。

問5 この問題も、特徴的な4カ国を比較するものであり、判別は容易であった。

第6問 例年地域調査の大問は、地理Aとの共通問題である。今年も地理A第5問と共通となっている。知多半島という一つのまとまりある地域を取り上げ、自然から人文にわたり様々な地理的内容をたずねている。愛知用水開削や国際空港開設など作問のためのトピックも豊富である。また名古屋大都市圏の一部でもあり、大都市との距離を考えさせる問題もある。こうした点から、優れた地域選定だと考える。全体として良問に仕上がっている。

問1 数値データを用いた地図の読み取り問題である。間違わせ方が単純で、やや平易な問題である。このような基本的問題も必要であることは理解するが、もうすこし読み取らせる内容に工夫がほしいところである。

問2 きちんと読み取ることができれば、解答することができ、やや平易な問題である。しかしながら、統計地図を正確に読み取することは重要な技能であり、今後も出題を続けてほしい問である。

問3 新旧地形図を比較させる問題である。たずねている内容は基本的内容であるが、短文内容を丁寧に読図する必要があるので、受験生は解答に時間がかかったのではないか。このように地図を比較する技能問題は、今後も重視して欲しい。

問4 軽量で高付加価値の品目が並ぶものを航空貨物と考え、燃料や重量のある品目を船舶貨物と考える。その後、輸出と輸入の品目をさらに比較させている。このようにステップを踏んで考察させており、良問といえる。

問5 常滑市の景観写真から気づいた点を調査するという設問。フィールドワーク中に感じた「疑問」を大切にしてほしいというメッセージが込められており、好感が持てる。ただし、正解となる短文は地形図からの判読できない内容を判断することになっており、訴求点がオーソドックスとなっているのが残念。しかしながら、このような地域調査の手法に関する問は今後も続けてほしい。

問6 内容は工業立地と統計の読み取りであり、地理Bとしては比較的易しい。また、市役所職員との会話文を素材とした設問であり、フィールドワークをイメージさせようとした点で、出題者の努力がうかがわれる。

3 ま と め

全体として、設問のバランスが取れており、良問も多く適切な出題であったと考える。中でも大問3問4や、大問4問1は良問であったと指摘しておきたい。GISの普及にともない、新しい地図表現が容易となり、新しい出題形式が可能となった。今後もこのような出題を試み、高校教育にいい意味でインパクトを与えていただければ幸いである。

一方、出題される地名については、学習すべき範囲のものかどうかは検討をしていただきたい。解答に影響しない地名・国名はともかく、キーになるものについては、吟味が必要である。また、写真・図等の活用については引き続き研究が必要であろう。写真・図等の活用に関してのレベルをうまく判別できれば、標準偏差が小さい、すなわち弁別性が悪いという問題も解決できるかもしれない。

最後に、短文選択で「適当なもの」選択が3問に対し、「適当でないもの」選択が11問にのぼっ

た。作問上、誤文作成の方が難しいことは理解するが、このあたりのバランスにも配慮していただきたい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 遠 藤 文 雄 会員数 約500人)

T E L 0422-46-4181

1 前 文

全国地理教育研究会は、主に全国の高等学校で実際に地理を担当している教師を中心として構成された研究組織で、会員は年一回の研究大会と年二回の会報の発行を軸に研鑽を重ねている。それだけに、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の問題には強い関心を持っている。毎年、センター試験の実施後には検討会を設け、さまざまな角度から意見交換を行っている。今回も、常任委員会で出された声をまとめ、本会の意見・評価とする。

2 試験問題の程度・設問数・形式等

(1) 試験問題の程度について

今年度のセンター試験本試験は、とくに地理Bで易化し、平均点では地理Aで51.76点（前年度比+1.67点）、地理Bで69.68点（同+7.80点）となった。これは、地歴公民の選択科目を地理に決めて受験に臨んだ生徒たちには納得の結果であった。「地歴・公民科目の中で、なぜ地理だけが突出して難しいのか」「授業を通してこのようなことまで教えなければならないのか」「どのような授業をすれば、しっかり学習している生徒に学力なりの点数をとらせることができるのか」といった昨年度までの声は、今年度については収まり、「今年度の程度で適当である」という声が多く聞かれた。知識を直接問わないからこそ解答に必要となる「受験生の常識レベル」の設定も、今年度に関しては問題が少なかった。

地理Bでみた場合、90点以上の得点者は相変わらず少な目である。それは、地理の場合、他科目のように即座に解答が求められる小問が極めて少なく、どの小問も「初見の図表や地図、設問文など、読み込む内容が多く時間をかけて考える」ことになる上に、「複数の知識を重ね合わせて問う組合せの設問」が多いことが要因である。他科目との平均点を調整することに意識が行き過ぎて、過度に難度の高い設問が並ぶことがないように、今後も慎重な対応をお願いする。

また、地理Aは今年度も平均点が極めて低くでているが、これは、地理Bの受験者が取り組んだとしても容易に解答できないような設問がみられるように、知識が相当程度あることを前提に作問されていることが影響している。難しい課題ではあるが、とくに地理Aについては、2単位科目であることを踏まえ、知識の有無に特化せず、資料の読み取りや資料活用、思考判断をとまなう設問を増やしなが、受験生の学力や常識のレベルをより正確に見極め、思いがけず難問になるということがないように作問する努力を引き続き求めたい。

今年度の結果を踏まえ、次年度以降も、時間がかかりすぎることがないか、地理の学習範囲を逸脱した設問はないか、問い方をひねりすぎていないかなどを十分に精査するなど、一層の内部努力を強く期待する。なお、出題の範囲がここ数年固定されていることで受験生には準備しやすい環境となっているが、出題のテーマが大きく変更されるような場合は平均点が大きく下がる可能性が高いので、傾向を変える際は、難易の調整をより慎重にお願いしたい。

(2) 設問数や大問の構成、形式について

大問数は地理A 5問、地理B 6問で変更はなかったが、小問数は地理Aで36問に戻った。小問によって4点の配点となる点が疑問視されたことによるのだろう。地理Bも36問となった。しっかり読み込んで取り組んだ受験生には、地理A・地理Bともに時間はぎりぎりで見直す余裕もなく小問数が増えることは好ましいとはいえない。しかし、今年度については、肢文を6文にして2択にする形式で解答数を調整しているので、負担増は最小限に留められたと考える。

大問の構成では、地理Aに「地理の基礎的事項」の出題が残った点、地域調査の大問がA・B共通である点は変化がなかった。全体に大問のテーマはここ数年ほぼ固定されている。

問題の形式については、例年通り、①「組合せ」の設問が多用されていること、②地理A・地理Bともに地図や図表・グラフが多用されていること、③地形図の利用が改めて定着した感があること、④地理B第2問でリード文がみられること、⑤例年になく見ごたえのある写真が用いられていること、などが指摘された。

①について、解答に時間を要する原因の一つである「組合せ」の形式は、今年度も、地理A・地理Bでともに15問と多用された。地理Aでは、過去5年で11→13→12→15→15問、地理Bでは12→18→11→13→17問となっており、大問ごとに2問は出題され、最早定番の形式として受け入れざるをえない。ただし、「組合せ」の形式は、作問上、4択にしにくいなど致し方ない場合を除き、安易に多用することは控えるように重ねてお願いしたい。②については、地理A（地図・図13、地形図2、表5、グラフ5、写真5、絵・イラスト0）、地理B（地図・図14、地形図2、表7、グラフ3、写真3、絵・イラスト0）で、例年通り図表の読み取りを問う設問が多くみられた。地理である以上、適切に地図や図表を読み取る技能は重要であり基本的に歓迎する。ただし、理解に時間を要する凝った図表が複数出題されないように配慮をお願いする。③について、地形図は、例年通り「地域調査」の大問で出題されたが、地理らしい設問として歓迎したい。④についてはリード文が大問上、あるいは小問の中で必要不可欠なものになっているかの検証が必要である、という声があった。⑤について、今年度は、面白い写真が多く、写真を生かした小問が複数みられると評価する声が多かった。

3 「地理A」について

地理Aとは何か、地理Aらしい設問とはどのようなものかについて、引き続き課題が残った。現状、2単位の授業で扱える内容はかなり限定される。義務教育段階での社会科の学習内容も知識レベルではきわめて薄い。その意味では今年度は、第4問と第5問については適切なレベルの小問が並んだ印象で評価したい。しかし、第1問から第3問については、高等学校での授業の実際を考慮すると、出題範囲としては適切でありながらも、地理Bとのちがいが明確でない「知識を前提とする」設問が目立つ。これでは、正答率はかなり低めだったはずであり、さらなる善処を期待したい。

第1問 「地理の基礎的事項」 正距方位図法の世界全図から4小問、地形図読図の技能から2小問と、基礎的事項に相応しい作問がみられた。基礎的事項といいながら、見慣れない地図からの設問や地形図学習の応用能力が問われ、正解率はかなり低くなっただろう。

問1は正距方位図の中心となっているブラジリアからの最短距離の地点の選択。基本。

問2は時差。基礎的事項も正距方位図であり経線の間隔の確認も必要なので難易度は標準。

問3は図上の3地域の地体構造と産出する鉱産資源。位置を正確に捉える必要もあり標準。

問4は図上の1地域の植生に関する文選。地域の示し方についてスケールの無理がある。

問5は国家と領域に関する文選。これは詳細に過ぎる知識を問うており難問。

問6は熱帯地域の農地の景観写真と説明文との組合せ。判断は可能で標準。

問7は地形図を基にした模式図による尾根線と谷線の読み取り。①、③は、読み取れないこと、すなわち判断できないことなので誤り、というところが難解。

問8は海岸平野における土地利用。地形図を基にした模式図で一般的な土地利用を判断する形式は今後の定番となるのだろう。標準の難易度とみる。

第2問 「国境を越えたさまざまな結びつき」 モノや人の国際的な移動について、例年通り初見の図表を用いて問うている。小問を羅列した印象は否めない。定番の出題範囲ながら、国や地域の特徴についてかなりの知識が求められ、総体として時間をかけた考察が必要であり、この大問も正解率は低かっただろう。

問1 近年の日本の貿易相手国。主要国との貿易総額の推移のグラフの読み取りで易問。

問2 水産物・畜産物4品目の日本の輸入先。主要品目でありこの判別も容易で易問。

問3 4か国の船舶による貨物取扱量。表の各項目と各国の特徴や近年の動向を総合的に考察して正解を導く良問。日本の現状をも問うている意識の高い小問と評価する。

問4 日本企業3業種の海外現地法人数と地域別割合。視点は面白いが受験生には難問。輸送機械製造業の海外進出先に日米貿易摩擦を想起してEと判別するのは地理Bか。

問5 4か国間の訪問者数。アメリカ合衆国を軸に考察する。難問。日中韓の相互関係に相当な知識が必要。

問6 在日外国人の国別の男女別年齢構成。これは定番の知識問で標準。

問7 国家間の結びつきに関する下線部の正誤文選。6つの肢文からの2択の設定。判断が容易で易問となっている。

第3問 「アフリカの自然環境と生活・文化」 学習機会の少ないアフリカについて地誌的に問うた大問で、地理Aレベルではやや酷な小問がみられる。誤りは明確でも、それが判別できるのは知識があるからこそなので、第2問に引き続き正答率は低かっただろう。

問1 地図中の3河川流域と説明の正しい組合せ。代表的な河川であるが地理Aでは標準。

問2 地図中の4か所の地形断面図。赤道の断面を問うているので許容できるがその他を問うことはあり得ない。標準とする。

問3 地図中の4地域の農牧業を述べた文の正誤文選。作物と自然環境の不整合。標準。

問4 東アフリカの生活文化。民族布を纏う女性の写真が生きている。説明文の空所補充の形式。選択肢はそれぞれ2択の組合せであるが平易である。

問5 地図中の3地点の都市景観写真。写真ごとの説明も参考になるが地理Aでは標準。

問6 地図に示された4か国の産業と資源開発の正誤文選。5つの肢文からの2択。ハードルは下げているが標準の難易度か。

問7 アフリカ諸国のODA拠出国と被援助国。知識でフランスは班別できるが日本とアメリカ合衆国は勘になる。難問である。

第4問 「地球環境課題と国際協力」 地球環境問題に関して基本的な内容の小問が並び、例年と比較すると、受験生には相当に取り組みやすかったと思われる。

問1 4か国の二酸化炭素排出量の経年変化。経済の発展度を踏まえて容易に判断できる。

問2 自然エネルギーによる発電の課題。写真と説明文の組合せ。これも判断は易しい。

問3 地球規模の地図中の6地域にみられる環境問題や自然災害。これも定番で平易。

問4 環境問題に関する国際協力について述べた文の正誤判定。定番の知識で判別でき易。

問5 水利用の課題に関する文の正誤判定。問4に続き迷う要素が少なく平易である。

第5問 「愛知県知多半島の地域調査」 主題図や新旧地形図の読み取りなどを取り入れ、今年度も丁寧な作問がなされている。地理A受験者にとって不利はなかったと判断する。

問1 知多半島の地勢についての主題図の読み取り。説明文中の2か所の下線部の正誤を問う形式で難易度を上げているが判断は容易である。

問2 自治体ごとの人口に関する主題図の読み取り。読み取った文の下線部の正誤判定の形式。3つの図を比較しながら判定させる良問である。地理Aでは標準の難易度。

問3 新旧地形図を比較し読み取った文の正誤文選。②の「砂州が消滅した」という表現と③の「ため池群が消滅した」という表現に曖昧ではないかという疑問の声があった。

問4 中部国際空港と名古屋港の貿易品目。これは知識問であるが判別は容易。

問5 調査方法の適否を問う小問。写真が面白い。まず正解ありき、のつくり。平易。

問6 現地調査での会話文から空欄を考察する小問。これも平易。

4 「地理B」について（地理Aとの共通問題を除く）

今年度の本試験地理Bは、出題範囲に大きな変化がなかったことはここ数年と変わらないが、難解な小問や作りすぎの小問が姿を消し、学習の成果を正確に問えている印象である。

第1問 「世界の自然環境」 昨年度と同様に基礎的事項の地理B版の趣きである。地形と気候の総合雑題という印象であり、概ね学習の成果が問えている。

問1 地図中の4地域の地形の特徴に関する説明の正誤文選。定番の設問で標準の難易度も、イとウの海域の説明文の内容は学習機会がないので誤った生徒が多かった。

問2 経度で仕切られた3つの範囲における緯度帯ごとの地震発生数。図2は面白い。工夫された設問で良問と評価したい。標準。

問3 地図中の3つの湖と説明文との組合せ。基本的な知識で易問である。

問4 地図中の成帯土壌の分布から、その特徴を述べた文を選択する小問。基本。

問5 地図中の4地点の気候。4地点の位置の把握と図3の読み取りの組合せで標準。

問6 地図中に示された4地点を結ぶX、Yの1月と7月の降水量。大気の大循環など気候学習の成果を問う小問となっている。標準。

第2問 「世界の資源と産業」 定番のテーマであるだけに、作問に工夫してオリジナリティを出そうとした努力には敬意を表したい。しかし、それによって地理らしい問いから離れるなど、やや難易度が増した印象はある。

問1 農業地域の成立とその要因との組合せ。世界史の出題ともとれる。標準。

問2 4か国の米の生産量と輸出力。図1の示し方に工夫がみられる。標準。

問3 金属資源の産出量。金鉱と銀鉱が目新しくやや難。

問4 韓国とフィリピンの輸出品目の変化。これも面白い問い方。標準。

問5 4か国の近年の産業立地についての正誤文選。明らかな誤文がありやや易。オーストラリアのウランの産出を知る生徒が迷うか。サイエンスパークには違和感。

問6 グラフを読み取れば地理的技能となるわけではない。文章の下線部の正誤判断も含めて政経の小問である。程度は標準。

第3問 「都市と生活文化」 世界と日本の都市に関する小問で構成された大問。つくり難のある設問もみられる。

問1 世界諸地域の都市人口率と人口500万人以上の都市数。これは基本で平易。

問2 ロンドンの都市計画。田園都市構想の提唱と大ロンドン計画の発表の時期の前後を問う形式は歴史の作法で地理の問いになじまないし、そのようには教えていないので生徒は誤った者が多かった。やや難の程度とする。

問3 京阪神大都市圏に位置する3都市の景観と昼夜間人口比率、老年人口割合の正しい組合せ。都市名を示さず一般化して、指標との整合を問う形式で面白い問い方。標準。

問4 日本の人口40万人規模の地方都市における施設の分布図から施設の立地地点を特定する設問。長野市ではこのように分布しているのだろうが、この図で大型小売店と銀行の立地地点を判別するのは決して容易でない。やや難とする。

問5 日本の各地方の県庁所在地における冬の光熱費と延べ床面積。図2の考察がやや難。PとRが2択なので難易度は標準とする。

問6 都市における消費・余暇活動に関する正誤文選。これは判断が容易で易問。

第4問 「西アジアの地誌」 イスラム教や乾燥気候など従来扱ってきた内容と異なる斬新な問いが並んでいる印象で興味深い。

問1 地図中の4つの範囲の集落分布。首都の数や位置なども参考に判断する。面白い図。河川や砂漠など自然環境の大まかな理解も加味すれば解答可能。標準。工夫した良問と評価する。

問2 4か国の水資源量。地下水量や淡水化水量を問うている点が面白い。標準。

問3 石油の生産量上位8か国の1人当たりGDPとGDPに占める石油収入の割合。西アジア3か国の人口や石油依存度の大まかな理解が必要。やや難。

問4 ドバイの景観写真とそれぞれの写真の説明文の下線部の正誤判定。魅力的な写真が用いられている。西アジア諸国の理解につながる肢文であり評価したい。標準。

問5 地図中の3つの海峡。位置と説明文の組合せ。学習事項である。標準。

問6 4か国の国勢の説明からイランのものを選択する設問。国単位の知識理解を要するのでやや難か。

第5問 「現代世界の諸課題」 引き続き小問5問で構成されているが解答数は6問となっている。今年度は環境問題を中心に出题された。ここに来て、容易に判断できない小問が目立つ出題範囲となっているが、今年度も問1と問5が該当する。設問の作成に窮しているのはわかるが、あくまでも学習した成果が問える設問となるように慎重に対応願いたい。

問1 世界各地の森林の状況に関する肢文の下線部の正誤文選。図1が全く生かされていない

い。たしかに②と⑤の下線部は明確な誤りであるが、それぞれの肢文について、知識があるほど適当といいきれない材料があり迷った生徒が多かった。程度は標準。

問2 アメリカ合衆国中西部の環境問題。センターピボットの写真もあり選択は容易。

問3 鉱産物の開発にともなう影響を述べた文の正誤文選。誤りが明確で平易。

問4 3か国の廃棄物発生量とリサイクル率。各国の含まれる地域の環境への取り組みの姿勢が明らかであり判別は容易である。

問5 問4に引き続き3か国のGDPに占める医療費の割合と医療費に占める公的支出の割合。これは初見の表であり判断に迷う。とくにアメリカ合衆国のオバマケアを知識としてもっていると誤る生徒もいたか。難易度は標準とする。

第6問 「愛知県知多半島の地域調査」 小問ごとの評価は地理Aでの記述の通りで地理Bではやや易問となったと思われる。

5 要 約

本試験の地理A・地理Bを小問単位で検証した結果、本年度は昨年度までと同様に高等学校までの学習内容に概ね沿った設問の割合が高く、学習範囲を逸脱した難問や奇問はほとんどみられなかった。この点は高く評価したい。また、昨年度までの数年と異なり、理解や判断に時間がかかる設問や、受験生が誤解をするような表現も影をひそめ、スムーズに解答できる印象があり、このことが地理Bの予想以上の高得点を産んだと考えられる。ただし、地理Aでは第1問から第3問にかけてが、息の抜けない小問が連続し、平均点は上がらなかった。受験生の「地理は異様に難しい」「十分勉強したのに報われなかった」「地理を選択すべきでなかった」という声は今年度については払拭できた。次年度以降も今年度の難易度を参考に作問をお願いします。

本会では昨年の講評においても『受験生が高等学校までの授業で学習している範囲や常識的に身に付いていると考えられる知識レベルを作問される先生方に十分徹底してほしい』『知識を学ぶ学習が、これまでより大幅に減っている現状では、知識を前提とする設問にはより一層の深い配慮をお願いしたい』『先生方相互のチェック機能をこれまで以上に働かせてほしい』といった厳しい指摘と依頼をさせていただいた。この提言は改めて確認したい。

また、本会は例年、(1)基礎・基本としての必須な知識を整理し、それを前提に作問し、それ以上のレベルの知識には必ず情報を与えること、(2)授業で扱うことのない専門性の高い内容や未だ研究段階で諸説あるような内容を安易に出題しないこと、(3)専門性の高い作問者の常識と受験生のそれとの落差に留意すること、(4)解答にかかる時間に十分に配慮すること、を重点としてお願いしている。本会は学習の成果を踏まえた設問であれば難問でも評価する。今年度も作問者のご苦労は十分感じ取れた。次年度以降もわれわれの手本となる問題の作成が行われることを期待して講評を終わる。